

教育支援を受けた中国少数民族女子学生将来の進路に対する意識について
—日本雲南聯誼協会「25の小さな夢基金」プロジェクトを例として—

北海道大学大学院 環境科学院
環境起学専攻 実践環境科学コース
王寧

2030年までの持続可能な開発目標(SDGs)の一つとして、教育が位置づけられている(Goal 4)。SDGs達成のために、教育が開発を進める原動力となることや、学校教育によって生活に変容・変革を促されることが期待されている(世界教育フォーラム、2015)。中等教育の就学促進は、発展途上国における今後の重要な課題となる。沈(2017)によれば、2015年の中国平均レベル(87%)に比べ、雲南省の後期中等教育段階(高校)への純進学率は80%と低い。これは、本研究の対象となる、中国雲南省少数民族の高校進学率が低いことが一因となっている。

従来の研究は、進学率を重視した支援機関の視点から量的な調査したものが多かった。中国少数民族の教育問題に関する研究では、貧困や中国政府の政策に関する分析が重点的に行われてきた。その一方、少数民族女子学生の将来の希望や考え方に焦点をあて、彼らへの卒業後の継続的な影響およびその要因に関して質的研究が求められる。日本雲南聯誼協会は、2006年から、昆明女子中学校の「春蕾女の子クラス」に進学する中国雲南省少数民族の女子中学生に支援している。

本研究では、彼女たちの現状を把握し、学生自身の視点から、支援されたことについての考え方、将来の進路に対する影響およびその要因を明らかにする。現地調査として、2017年6月末～7月約一週間中国雲南省に滞在し、日本雲南聯誼協会の「ふれあいの旅」に参加し、昆明女子中学校の「春蕾女の子クラス」に日本雲南聯誼協会の支援を受けた学生を調査対象とし、参与観察・聞き取り・アンケートを実施した。また、2018年に学生10名を調査対象とし、追加聞き取りをした。

これまで修了生の8割以上が大学へ進学し、そのうち78%が雲南省内の大学、うち22%が省内外の師範大学を選んだ。将来「地元の教師を目指して」、「私のような山奥の学生を助きたい」という理由が多い。そして、支援を受けた学生は山奥出身で、都市の生活に慣れないし、将来両親を面倒しなければならないので、地元で就職を考える学生が多いことが明らかになった。また、学生は日本雲南聯誼協会の教育支援を受けたことより、「恩返し」の気持ちを生まれた。一部分の学生は支援者との順調的な手紙のやりとりや日本の支援者が参加する卒業式など交流活動より、支援者により詳しく理解できた、「恩返し」の気持ちを深まってきた。従って、将来「地元の教師を目指して」など地域への「恩返し」気持ちが醸成された学生が多かった。というのは、学生たちは支援者との交流活動の有無は、将来の進路に関係があることが明らかになった。その一方、大学で就職しやすい専攻を選んで、将来安定的な仕事をしたいというような経済的なストレスが貯まっている厳しい生活環境の中で、「私のような山奥の学生を助きたい」というような地域への「恩返し」気持ちを行動へ移すことが厳しいと考える。つまり、学生は日本雲南聯誼協会の教育支援活動より、「恩返し」の気持ちが深まってきた、社会への「恩返し」というような考え方を変化させる重要な要素になっていることが明らかになった。